

雄志・八千浦中学校区 同和教育だより

<雄志中・八千浦中・諏訪小・戸野目小・上雲寺小・高士小・八千浦小 共同発行>

[平成 29 年 2～3 月 No. 9 (最終号)]

成果（子どもたちの姿）を発表しました



2月23日(木)に、教育プラザで同和教育研修会が行われ、120名余の教職員や同和教育、人権教育に熱心に取り組んでいる方たちが参加しました。私たちは、2年間の研究指定の間に、児童生徒、保護者、地域の皆さんとともに取り組んだことや、その成果を発表してまいりました。



私たちは「自分や他者の人権を守るために行動できる児童生徒の育成」を研究主題に据え、「児童生徒の行動の変容こそを最大の評価項目とする」という思いで、保護者や地域の皆様と力を合わせ、ともに学びながら、2年間取り組んできました。

その結果、児童生徒の行動の変容として、雄志中学校の生徒会は「いじめ見逃しゼロの宣言文づくり」を全校生徒で進めました。今年度は初めて、1年生から3年生の縦割り班で話し合い活動を行うなど、よりよい取組に向けて工夫がなされました。



また、八千浦中学校の生徒会は、全校生徒が安心して過ごせる学校をつくろうと「陰口ストップ運動」を行いました。

これら質の高い自治的な取組は、各中学校区で開催される「いじめ見逃しゼロスクール集会」を通じて小学生にも紹介され、小学校児童会においても自治的な取組が推進されてきています。



児童生徒の自治的、自発的な「人権を守る取組」の高まりこそが、私たちの研究の成果と言えるでしょう。

私たち教職員も、児童生徒が不当な差別やいじめに苦しむことのないよう、またそれを見逃すことがないよう、真摯に取り組んでいこうと、決意を新たにしています。

研究のバトンは、他の中学校区に引き継がれますが、来年度以降も、各校、各中学校区で、同和教育を中核とした人権教育に誠実に取り組んでまいります。

ふるさと（父のねがい）

丸岡 忠雄

“ふるさとをかくす”ことを
父は
けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ
縊死した友がいた
ふるさとを告白し
許婚者（いいなづけ）に去られた友がいた

吾子よ
おまえには
胸張ってふるさとを名のらせたい
瞳をあげ何のためらいもなく
“これが私のふるさとです”と
名のらせたい

生まれ育った場所を理由に「いわれのない差別を受ける」、「結婚を反対される」、「就職ができない」。これが部落差別問題（同和問題）です。「そっとしておけばなくなる」とおっしゃる方もおられます。本当にそうなのでしょうか。



私がまだ 30 代前半であったある年。担任学級で、結婚差別問題についての授業をしました。

「ある男性が、被差別部落出身であることを理由に、相手の女性の親に結婚を反対される」という、実際にあったお話を紹介すると、生徒は一律に「いわれのない差別だ。許してはいけない。」と感想を述べました。その時間の最後に「ではもし、あなたが、相手の女性の親だったらどうするか。」と問い、一人一人に書いてもらいました。授業を終えた後で目を通し、衝撃を受けました。学級の約 3 分の 1 の生徒が、こういう趣旨のことを書いていたのです。

— 「もし自分が女性の親だったら、結婚に反対するかもしれない。だって、自分のかわいい娘が、『いわれのない差別』を夫と一緒に受けながら生きていくことになるのは辛い。もし子どもが生まれたら、その子、つまり私の孫も…と考えると、賛成できないかもしれない。」と—

深く考えさせられました。生徒を責める気持ちは、湧きませんでした。「— 私たちはふだん、『差別はいけないことだ』という知的な理解で、自分の心にある『差別意識』を心の奥底に押し込んで暮らしている。しかしひとたび、自分や家族の問題として直面した時、『差別意識』があらわになる—。」以前に聞いていた言葉を、強く実感しました。と同時に、「差別」を自分の外側に置いていた自分を、深く恥じました。「生徒たちは、自らを見つめ、心の奥にあるものを私に伝えてくれた。では、私はどうであったか。自分の中にある差別意識を見つめずして、子どもたちに人権を問うことはできない」と。



同和問題は、わが国固有の人権問題です。2016 年 12 月に「部落差別の解消に関する法律」が参議院で可決され、成立しました。その第一条には「現在もなお部落差別が存在するとともに、情報化の進展に伴って部落差別に関する状況の変化が生じている」と書かれています。

「部落差別は、そっとしておけばなくなる。」— 本当にそうでしょうか。

大地震の被災地から避難してきた子どもへのいじめ。これも、「生まれ育った場所を理由にした、いわれのない差別」です。私たちは、真実を学び続けなければなりません。学ばないと見えてこない真実が、確実にあります。

差別の「真実」を学び、思いを共有し、知恵を出し合い、力を合わせて、いわれのない差別に苦しむ人を支え、守り、助けていくこと。このことこそが、これからの「共生の時代」を生きる私たち、そして子どもたちに求められる資質であると考えています。

<文責：事務局 五十嵐守男（諏訪小学校）>